

<中学生の部 最優秀賞>

継ぐ、^{うけつ}承ぐ。

山形県立致道館中学校 3年 伊藤 息

「いぶきー。よぐきたのー。」

神社で地域のじいちゃんたちが僕をむかえる。今年も、玉杉の注連縄づくりの日がきた。

僕が住む、山五十川地域には、樹齢一五〇〇年以上の杉の巨木「玉杉」がある。その幹には、長さ一七メートルもの注連縄が巻かれており、毎年新しい注連縄に交換される。

長さ一七メートルの注連縄をつくるとなると十数人ではとても足りない。注連縄は、麦わらの束を三本巻き付けて構成されるが、麦わらが太すぎるため一人では掴めない。チームワークがとても重要だが、役割を分担しなくても、玉杉保護会長の掛け声で、全員いつもの持ち場について動き始める。

僕は、玉杉の前で注連縄をつくっているじいちゃんたちは、玉杉の一部であるように感じる。玉杉とともに暮らしてきた人々の醸し出す生き様だ。山五十川は玉杉以外にも、山五十川歌舞伎・山戸能などの古典芸能、温海かぶ・孟宗汁などの郷土料理、他にはない文化が静かに、しかし確かに受け継がれてきた。そんな山五十川にいと、生活の中に、何百年も前の文化があることを自然と受け入れることができてしまう。しかし、過疎化は進み、僕が経験する前になくなってしまったものも数多くあるらしい。玉杉の注連縄づくりもいつかはなくなるかもしれない。

もしそうなれば、山五十川はもう、山五十川とはいえないのではないか。今まで、数え切れないほどの人が何百年も大切に守ってきたものでも、なくなるのは一瞬だ。しかし、ここに暮らす意味は、地を知り、地を学び、地を生きることを自分自身で選ぶことではないか。

大型ショッピングモールができ、高速道路がつながれば、便利になって住みよくなるだろう。でも、山形にしかないもの、山形でしかできない暮らしを手放して、土地だけあってもそれは山形と言えるだろうか。人と人とが紡いできた時間こそが山形の文化であり、僕が誇りに思う山形だ。山五十川を伝えていこう、そしてまた一五〇年、山形が山形であり続けられるように僕は願う。